

三〇〇〇通の手紙から見えてくるもの

— 第五福竜丸無線長・久保山愛吉と家族に送られた手紙を読む

市田 真理

手紙。その多くは特定の個人へ送られるもので、無関係な他者の目に晒されることを前提にしていない。六〇年を超える時を経たからといって、受取人ではない私が公にすることは、どこまで許されるのだろうか。およそ三〇〇〇通の手紙の前に立ちすくむ。そこには時代の匂いや不安や怒りが封じ込められており、ときに理解に苦しむ言葉遣いやあからさまな敵意さえもが込められている。ハガキ、封書、巻紙、寄せ書きと形式もさまざま、筆記具もさまざま、年齢も肩書も実に多様だ。誰がどんな思いでこの手紙を書いたのか。一通一通を読み込み、整理番号をつけ、データベースを作るうち、書き手の姿を想像し、手紙という空間に沈潜していく。

報道から始まる「ビキニ事件」

一九五四年三月一日、マーシャル諸島ビキニ環礁東方一六〇kmで操業中のマグロはえ縄漁船・第五福竜丸は、アメリカの水爆実験の閃光を目撃し、衝撃音にみまわれた後、放射性降下物「死の灰」

を浴びた。乗組員二三名は頭痛、吐き気、皮膚疾患（β線火傷）、脱毛などの症状を発症し、二週間後の三月一日に静岡県焼津に帰港した。三月一六日の読売新聞朝刊で「邦人漁夫、ビキニ原爆実験に遭遇」と報じられ、たちまち大騒ぎとなった。いわゆる「ビキニ事件」が始まる。この日の夕刊から各紙が一斉に報道し、地元静岡新聞はもちろん中部日本新聞、伊勢新聞、奈良新聞など第五福竜丸が水揚げしたマグロの流通した地域紙や日刊食料新聞でも築地市場での混乱が連日報じられた。「第十一日光丸、通風筒から放射能」（三月一七日・朝日新聞）、「第十三光栄丸、マグロ九〇〇〇貫廃棄」（三月三〇日・朝日新聞）「漁船一隻に影響、参議院水産委員会で説明」（三月二三日・毎日新聞）と、築地や三崎（神奈川県）、清水（静岡）など指定港での検査が始まり、船体や漁獲物から核実験由来と思われる放射能が検出され続けた^①。当時のニュース映画に、築地市場のわきに穴を掘り、第五福竜丸の漁獲物（愛知の仲卸を経由して陸送されたもの）を廃棄する様子が記録されている。映画館で人びとはその様子に戦慄したに違いない。

第五福竜丸乗組員たちは、帰港した一四日、焼津協立病院で診察を受けた後、とりわけ外傷の激しかった二名を東大病院へと送り出した。残った他の乗組員たちは「いつものように」水揚げし、マグロは各地に送られた。読売新聞のスクープを受け全員入院、その後米軍機で東京へ移送された。この時にも新聞取材、ニュース映画のカメラが回されていたことを、遺された報道から辿ることができる。カメラは病室にも入った。

漁船では漁房長が航海と漁計画等の指揮権を持ち、国家資格を有する船長、無線長、機関長が幹部となり、それぞれのポジションでの責任者となる。無線長・久保山愛吉は、平均年齢二五歳という若者たちのなかではもともと年長者でもあり、こうした取材に応募することも少なくなかったようだ。記者に問われて水爆実験に遭遇したときの模様を語る姿も映像に残されている。被ばくから半年後、九月二三日に久保山愛吉は四〇歳で死去、妻・すずと三人の幼い娘が遺された。

船体保存運動と都立第五福竜丸展示館

この一連の事件は、サンフランシスコ講和条約発効二年足らずの日米関係にも、衝撃を与えた。在京米大使館からすぐに外務省に照会があり、事実確認とともに、第五福竜丸はアメリカ力が規定した「危険区域」内にいたか否かが問題となり、「第五福竜丸は漁業目的以外で」この場に居合わせたのではないかとの発言までもが米側から出された^②。一九五三年は原爆製造の機密漏洩、つまりスパイとの疑いでローゼンバーグ夫妻が死刑となり、核開発競争と原子

力の国際管理をめぐって米ソ対立が熾烈化している時期である。米側は機密保持のために放射能除染を申し出る^③。また日本側の機密管理がまったく態をなしていないと批判し、新聞記者が勝手に船を取材しないようにと牽制していた。結局船体は日本政府が買い上げて「研究資料」として保管されることとなった。海上保安庁の巡視船「しきね」に曳航され焼津から東京へと回航された第五福竜丸は、東京水産大学（現・東京海洋大学）の敷地内で一年半に及ぶ放射線の減衰観察の後、一九五六年、三重県伊勢市の強力造船所で、東京水産大学練習船「はやぶさ丸」へと改修された。約一〇年間学生たちの演習や各種実験に使用され、一九六七年廃船処分。スクラップ業者に転売された後、ゴミの埋め立て地だった東京江東区夢の島に放置された。はやぶさ丸Ⅱ第五福竜丸と知った平和運動関係者らに「発見」された船は、一年半にわたる市民運動により保存が実現し、一九七六年六月一〇日都立第五福竜丸展示館が開館した^④。開館に先立ち、一九七三年に船の保存と、原水爆被害を啓蒙する財団法人第五福竜丸平和協会が設立された（以下、協会）。その財団創立披露式での話が機縁となり、久保山すずより、久保山愛吉と家族に送られた見舞、弔意の手紙など約三〇〇〇通が協会に寄贈された。それらは加納竜一、近藤弘、長岡弘芳により整理され、協会編『ピキニ水爆被災資料集』（東京大学出版会、一九七六年）に一部が収録された。また整理の経過については長崎の証言刊行委員会編『長崎の証言』第六集（一九七四年）に加納らがそれぞれ寄稿している^⑤。

手紙の調査と活用

一九七六年六月一〇日第五福竜丸展示館が開館し、協会は機関紙「福竜丸だより」の刊行を開始する。一九七九〇八〇年に九回にわたり、手紙の一部を紹介し、差出人への取材等を行っている。館内の常設展示コーナーで一〇通前後を常時展示しているほか、筆者が協会に関わるようになった二〇〇一年以来、三回の企画展で特集展示している。また講演、ワークショップなどで参加者に朗読してもらうなど、手紙を書いた人の心情を共に考える取り組みを重ねている。この模様はNHK静岡制作「三〇〇〇通の手紙が語るビキニ事件」（二〇一四年八月三日放送）で紹介された。久保山愛吉氏の命日に行われている「平和を語る第五福竜丸のつどい」（実行委員会主催）では、手紙を題材にしたシナリオ（筆者作成）を展示館ボランティアの会メンバーが朗読することも一〇年を超えた。ボランティアの会メンバーには手紙の整理でも協働し、差出人の言葉に潜む「時代の匂い」を共に検証している。

これらの手紙は受取人以外の第三者が、声に出して読むために書かれたものではない。だからこそ、「自分」というフィルターを通過させて表現することで、当時の「気持ち」を追体験できるのではないか……。そんな試行錯誤を繰り返し返している。

焼津からの手紙

一九五四年三月二八日、乗組員たちは焼津から東京へ移送された後、東大病院に七名、東京国立第一病院に一六名と分かれて長

期入院生活が始まる。冷凍土だった大石又七によれば、病室に段ボール箱を置き、宛名が特定されていない「第五福竜丸のみなさん」「ビキニ患者御一同様」のような手紙はその中に入れて皆で回覧した、相当の数量だったと記憶しているという。自分宛のものであれば返信し、しばらく文通していた相手もいたようである。このことは操舵手・見崎進、操機手・池田正徳も同様に記憶しているのだが、いずれもその後、手紙をどうしたかは覚えておらず、手元にも残していないという。また船長だった筒井久吉によれば、見舞い品や手紙への礼状は筒井が書くことが多かったという（いずれも筆者の聞き取りによる）。

前述のように、久保山愛吉の姿と名前はニュース映画、新聞で報じられていた。三月一六日朝日新聞夕刊には愛吉のコメントが掲載された。「手紙」の日付のもっとも古いものは、三月一八日愛吉の兄・栄太郎に宛てたハガキで、「貴家の弟様ではないかと」驚いた、もしも不幸にしてそうであれば一報してほしい旨が記されている。夏迄は、愛吉の親類や乗組員家族からなど、地元・焼津からの手紙が続く。

この頃日米間の外交交渉は緊張のピークにあり、第五福竜丸乗組員の米国医療人による診察をめぐって険悪にさえなっていた。四月にはアリソン駐日大使から吉田茂首相に宛て、水爆の放射性降下物Ⅱ死の灰の分析をめぐって恫喝ともとれる書簡が送られた⁹⁾。漁業関係者が「水爆被害者対策大会」を築地で開催、NHKラジオでは三木鶏郎の「ユーモア劇場」が盛大に毒を吐いており、「水爆禍」と政治腐敗を「これが自由というものか」（四月四日放送）と痛烈に批判していた。

五月、各地のメーデーで「マグロの張りぼて」が登場していたことが、新聞、雑誌や同時代人の日記などに散見される。科学調査船・俊鶴丸がビキニ海域を目標して出航し海洋汚染を証明すると同時に、日本各地の雨から核実験由来の放射能が検出される。新聞の四コマ漫画は放射能汚染マグロⅡ原子マグロロパニックを皮肉り、不安や憤りの投書や読者川柳が投稿された。焼津市議会を皮切りに全国の自治体が次々に水爆実験反対を決議、衆参両議院、学会も声明を発表するなど、世論は大きくうねっていた。四月一日の原子兵器反対北海道協議会をはじめ、台東区魚商組合連合会（四月一〇日）水爆禁止署名運動杉並協議会（五月二〇日）など全国各地で署名も取り組まれていた。

ラジオの時代

八月末、久保山愛吉の容態が悪化し二十九日には意識が混濁して重態と発表された。八月六日には東京の病室と焼津の家族、広島をつないだラジオ生中継（文化放送）で長女・みや子に語りかけ、「ぼちぼちよくなっている」という愛吉の音声が残されている。雑誌「少女」七月号に掲載されたみや子の「学友のみなさんありがとう」と題した作文は、同世代の共感と深い同情をよんだ。この事態は、少女雑誌の付録の便箋に書かれた手紙が焼津の久保山家に多数届くさなかなことだった。

病院で同室だった大石によれば、九月四日一時的に意識を回復したものの、すぐにまたうわごとを言い暴れるため、ベッドからおろされ床に横たえられるほどだったという。その姿を見て大石は「次

は俺か、俺もあなるのか」と不安を募らせた^⑧。「久保山氏重態」の報道をきっかけに全国からの手紙が病室宛、焼津の自宅のみならず報道したラジオ局や新聞社にも届くようになる。三〇〇〇通のうちの大半が九月以降に書かれたもので占められるのはこうした状況があったこと、学校の夏休みがあげて、教室で愛吉やみや子のことと語られたからだ。静岡、高知、熊本、兵庫など学校単位で出された手紙・作文には「先生から聞いて初めて知りました」「友人と語り合っています」と記されたものも多い。生活綴方の指導があったのかも知れない。

また家族でラジオの前で心配していることを綴る手紙も多数ある。当時NHKに続き日本テレビの放送が開始されたばかりであり受像機もさほど普及していない。家庭での情報源はもっぱらラジオであった^⑨。

くるしむおぢさんへ

くぼやまさんのおぢさん、おからだがすこし良くなりましたとのこと。心からおよろこびもうし上げます。

わたくしのおうちでは、いつも朝と夜はビキニのかたがたのため、とくにくぼやまさんのおぢさんのために、おいのりをしておりました。おかあさんは、わたくしに、かみさまは良い人を引きつなわせてくださるでしょうと、ときどきおっしゃいます。

でもまだ、お目があかずにやすんでおられるとラジオがいいです。わたしは、ラジオがにくくて、にくくて、たまりませんでした。

今日、はじめてラジオが、すこしからだが良くなりました

といいましたので、わたくしはとてもよろこびました。そしてまた てんしゅさまに かんしゃのおいのりをしました。夜はみんなで かんしゃのおいのりをしました。

おぢさん ほんとうにおめでとごさいます。こんどはおぢさんが歩いたり、もつとたくさんお話しができるようにおいのりをします。わたくしのおうちは とてもたのしいです。ですから、おぢさんも早くてのしいおうちに帰ってくださいるように、元気になつてくださいね。

このおてがみ お母さんにないしよで出しました。ごめんなさい。

おぢさん ほんとうによかつたわね。どうぞ死なすにがんばってください。

ひろこも いっしょうけんめい おいのりをします。

おぢさん しなないでください

小学二年 ひろこ
(九月六日消印 差出地域不明)

九月二三日夜のニュースで「久保山愛吉死去」が報じられた。二四日く二六日消印の手紙は一〇〇通を超える。「ニュースを聞いて妹と二人思わず泣けてしまいました」「今日はどうかしら今日はどうかしらとしんばいしていましたが、午後七時の悲しい知らせが耳に入りました」と、思わずペンを取つたという文面があふれている。

くるしめおぢさんへ

いぼやまさんのおぢさん、おからたが
すこし長くおりましたこの心から
おようこが、あうし、おぢさん
めたくしのおうちでは、つる朝と
夜は、じぎ、おぢさんがたのため、とく
にくばやまのおぢさんのため、
おいのりをしておりました。おあ
さんには、わたくしにかみさまは、
良い人、をきくと、良く、おあし、
います、でもまだ、お目がおあし、
やすんで、いろいろ、とラジオ、いいます、

久保山愛吉が入院している病院宛て
小学生からの手紙

ラジオでまえに「くぼやまさんはなおつてきた」といいましたが、きょうになつてとつぜんしんだので、ぼくはかなしくおもいました。ぼくはみやちゃんと同じ三年生です。ぼくのおとうさんがしんだら、ぼくはどんなになくんでしようとおもいました。水そばくだんや、げんしばくだんは、わるいバクダンです。

(九月二五日消印 静岡県 小学三年 まさお)

補償金と漁民葬

久保山愛吉の遺体は病理解剖が行われ、病院内での葬儀の後火葬され、遺骨は焼津に戻った。映画『第五福竜丸』（新藤兼人監督、一九五八年）では、東海道線が停車するたびに花束を持った人たち

が遺族を弔問し、車内の客たちが無言で頭を下げる様子を再現しているが、すずら遺族が焼津に到着すると駅前には大勢の人が駆けつけ騒然となったという⁽¹⁰⁾。しかし、焼津市民の心境は「お百度参り」で愛吉の回復を祈った頃とは微妙に変化していたようだ。「久保山氏死去」の記事の隣には「補償金五百余万円に」「米大使から百万円」の見出しがおどつていた（九月二四日、毎日新聞）。

「チエつうまくやつてやがら。こんな出迎えなんて焼津始まつて以来だ。おい、お前も死んだらああしてもらえよ、ハハハ……」「チエつあれで保証金（ママ）たんまりもらつてよ、ウチの宿六なんて灰なめて死んじまえやエエダによ」と言つた会話がそここで交わされていたのだ⁽¹¹⁾。

一〇月九日、焼津市公会堂で「漁民葬」が営まれ、安藤正純國務大臣、駐日米大使館アリソン大使の名代としてパーソンズ参事官が弔辞を代読、花輪は一二〇を超えた⁽¹²⁾。この日にむけて送られた青年組織、学生自治会、労働組合、宗教団体等からの弔文、弔電が五〇以上残されている。なかには、「巢鴨プリズン」のBC級戦犯からのハガキや、引き揚げ船「興安丸」に乗り組んでいた人たちからの弔文もある。この日は出漁中の漁船からも弔電が送られ、総評加盟の各労組は一齐にサイレン、汽笛を鳴らし、職場では原水爆禁止職場大会が開かれたという。

こうした盛大な葬儀と弔慰金、日米政府の外交交渉によつて決められた「補償金」の報道が、のちに久保山家の遺族たちや他の乗組員をも苦しめることとなった。

久保山すずへの手紙

「こんなことをいうのは初めてだけれが、わたしア、ゼニがうらめしいだよ」と書きだされる読売新聞（大阪版、二月六日）には、羨望嫉妬の声が愛吉の妻・すずを苦しめていることが描かれている。「三人の子どもを着飾つて毎日出歩いている」「あんなにカネがありながら税金を安くしてくれと役場に泣きついた」とのウワサ話、日雇いでも働くこうかと近所の工場へいけば「お前さんみたいな大金持ちが働くことはあるめえ」と追い払われる。頼りにしていた愛吉の実家からも「もう面倒みきれない」と疎まれる、寄付の依頼、借金申し込み毎日のように見知らぬ人が訪れているという。記事の最後は、すずのこんな言葉でしめくくられる。「ゼニなんかいらねえ。お父ちゃんを返してくんな。死の灰がお父ちゃんを殺した。わたしア、ウワサの灰で、気が変になりそうだ。」

「同じ死んでもなあ、病院で手当てを受けたうえに、たんを見舞金をもらい、立派な葬式もやつてもらつて、なんちゅういいことずら、わしらも灰をなめて死にてえもんだ」という言葉があちこちでささやかれていた、というルポルタージュもある⁽¹³⁾。

私共の広島では、今尚、九年前の原爆による原爆症によつて幾人かは治療もろくにできず、何の補償すらなく不安におののき死んでいかなければならない方達がおります。貴女以上の苦しみと淋しさに打ちのめされて、誰一人省みてくれない孤児や女性が数多くおります。この度の久保山さんの事と比べて、あまりにもかけ離れ過ぎた、何か割り切れない思いでおりま

す……。

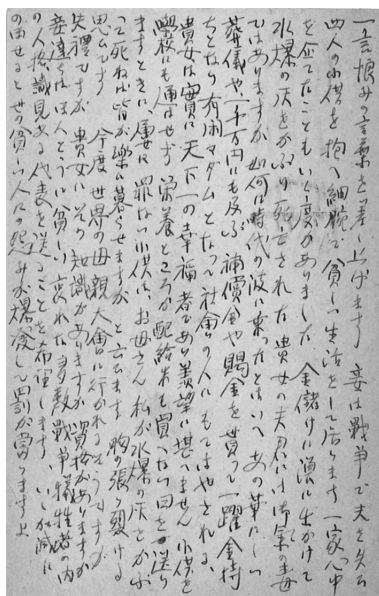
(匿名。「広島市一女性」と書かれている。九月二七日消印)

さぞかし楽しく明るいお正月をお迎えすることでごさいますよう……六五〇万円くれるなら、こんど水爆実験があつたら犠牲者になるという人が多いですよ……。

(匿名。封筒には「市内婦人会」と書かれている。二月二八消印)

すが、日本母親大会(一九五五年六月七日)で発言した後、世界母親大会に参加する代表者選ばれたとの報道があると、さらに厳しい手紙が送られてくるようになる。

一言恨みの言葉を差し上げます。わたしは戦争で夫を失い、四人の子どもを抱え細腕で貧しい生活をしております。一家心中を企てたこともいく度ありました。金儲けに漁に出かけて水爆の灰をかぶり、死亡された貴女の夫君は御気の毒ではありませんが、(中略)一躍金持ちとなり有閑マダムとなつて社会の人にもてはやされる、貴女は実に天下一の幸福者で羨望に堪えません。子どもを学校にも通わず、榮養どころか配給米も買えない日を送っています。罪もない子どもは「お母さん、私水爆の灰をかぶつて死ねば、皆が幸福に暮らせませすか」といいます。胸のほりさける思いです。今度世界母親大会に行かれるそうですが、貴女にその資格がありますか……。(匿名。「貧しい戦争未亡人」と書かれている。一九五五年六月一三日消印)



焼津の久保山宅宛て 匿名の手紙

脅迫めいた手紙や家への投石もあつたらしい。それでもさすがに国際舞台で証言させようという女性たちの声も大きかった。すずへの嫌がらせの手紙が報道されると「なんてひどい」「負けないでほしい」「ぜひ世界へ発信を」という手紙が送られてきており、中学生から大学生を中心に励ましの手紙が一〇〇通を超える。

母親大会を組織した女性団体や地元の女性教員たちは、すずを励まし、国連へ、カイロで開催されたアジア諸国民会議へと送り出そうと尽力した。だが、アメリカがビザの発給を拒否し国連へ行くことはかなわず、アジア諸国民会議でのスピーチは日本代表団の「内部事情」により実現しなかった。すずの発言を政府が警戒していたことが外交文書にも記されている。

焼津の教員・飯塚利弘によると、すずへの嫌がらせの手紙は八〇年代になつてもなお、届いていたという。すずは亡くなるまで、亡き夫の遺志として、母親として、この社会に生きる一人の間として

核廃絶を静かに訴え続けた¹⁴⁾。

苦しい記憶の宿る手紙の束を、第五福竜丸平和協会へ寄贈したずの心情を語る資料は残っておらず、当時の関係者もその多くが鬼籍に入られ、確かめることはできない。遺族からは筆者に対して「余計なことはもうしないでほしい。そつとしておいてほしい」との意思表示があった。しかし「あなたがどうしても書きたいのなら書きなさい。ただ久保山愛吉だけを特別視せず、ほかの乗組員の人生にも向き合いなさい、ほかの犠牲者のことも考えるのが条件です」とも言われた。その宿題を果たしているだろうか。一通の手紙が内包する事実は何れも重たい。一通の手紙が照射する「ビキニ事件」を追いかける旅は続く。

注

- 1 厚生省（当時）、水産庁の検査記録が近年開示されたが、指定五港（塩釜、東京、三崎、清水、焼津）と大阪以外の被害全体を示す詳細な記録については、現在資料がみつからない。一九五五年四月二十八日の閣議決定による慰謝料配分によれば、のべ九九二隻が汚染魚を廃棄していることがわかっている。
- 2 「被爆漁民スバイとも思える コール委員長が重大発言」（三月二四日・産経新聞）にはコール米上下院合同原子力委員長が、第五福竜丸が「漁業目的以外で実験区域へきたことも考えられないことはない」と発言したことが報じられている。
- 3 ビキニ事件に関わる外交文書。「岡崎外相宛 在米井口大使宛 三月二五日「第五福竜丸の被災事件に関する件」第二〇七号 極秘」……アリソン大使からは、イ福竜丸の汚染消除を米海軍に行わ

しめるか、同船を海中に沈めるか又は同船への立ち入りを防止された。口米側の技術者にも自由に患者をみさせてもらいたい（以下略）」とある。二三名の病状については、医師が個別に発表することを制限し、原爆症調査研究協議会（会長・小林六造。一九五四年一〇月七日原爆被害対策に関する研究連絡協議会、会長・塩田広、に改組）を通して発表することとなった。これにはアメリカ側の強い意向が働いている。坂元一哉「核兵器と日米関係」（『年報・近代日本研究』16号、一九九四年）、市田真理「外交文書にみるビキニ事件をめぐる日米交渉」（『第五福竜丸平和協会編』『第五福竜丸は航海中』二〇一四年）参照。

- 4 保存運動については、広田重道『第五福竜丸保存運動史』（白石書店、一九八一年）、第五福竜丸平和協会編『開館30年記念誌 第五福竜丸展示館30年のあゆみ』（非売品）に詳しい。
- 5 「長崎の証言」第六集では「ビキニ水爆被災二十年目の告発」という章が設けられている。原爆文学研究会で筆者がこの件を報告した際、参加者より「なぜ「長崎の証言」か?」との質問を受けた。鎌田定夫が序章で「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニをつらぬくもの——反原爆証言運動の今日の課題をめぐって」で、広島・長崎の原爆被害、ビキニ水爆実験の被害に一貫するものは「原水爆の反人間的、反民主的、反自然的な本質」であるにもかかわらず、久保山愛吉の死という衝撃に出会うまで、その本質に気づき、反原爆の国民的意識を持っていない。

被爆者運動二〇年がつかみ取ってきた自己救済と原水爆禁止の追求という哲学を敷衍し、「反原爆証言」という新しい国民運動——国民文化Ⅱ国民教育運動へと総合統一していく被爆者と国民共有の武器たらしめたい」と謳っている。被爆者運動二〇年とビキニ事件二〇年を重ね

ること、鎌田は証言運動をおしひろげようと意図したのではないだろうか。

6 「福竜丸だより」18号（一九七九年九月）〜28号（一九八〇年七月）。手紙に記されている住所をたよりに手紙を出したほか、サークル等へ電話で問い合わせたが返信は一件のみだった。

7 外交文書 駐日アメリカ大使館 ジョン・M・アリソン大使より吉田茂宛て四月二日付書簡。「日本の科学者による死の灰の分析・公表は日本と平和条約を結んでいない国々にとって大きな利益になるにちがいない。」などと記されている。

8 「俺たちもやがてあんなになるのだろうか。そんな自分の姿も想像しながら、みんな神経を隣の部屋に集中していた。」（大石又七『死の灰を背負って』新潮社、一九九一年）「いよいよ来るか、何番目だろう。あの七転八倒の苦しみは味わいたくないと一部始終を思い返しながら、久保山さんの苦しんだ姿に自分を重ね、覚悟を決める日々だった。」（大石又七『ピキニ事件の真実——いのちの岐路で』（みすず書房、二〇〇三年）

9 朝日年鑑（一九五五年）には全国で三九社五四局、一一二〇万七一一五八世帯が聴取していたとある。当時の人口八〇〇〇万人の大半がラジオをニュースソースにしていたといえるだろう。テレビの普及とピキニ事件との関連については有馬哲夫『日本テレビとCIA』（新潮社、二〇〇六年）に詳しい。

10 新藤兼人監督『第五福竜丸』（近代映画協会）はドキュメンタリードラマの手法で第五福竜丸乗組員の身に起きたことを、久保山愛吉の死と焼津で行われた漁民葬までを描いた。

11 焼津市職員組合青年婦人部「創造」創刊号（一九五六）『ピキニ水

爆被災資料集』所収。

12 奈良県の病院に入院中の青年からのハガキには「自由日本放送という民主的な」ラジオ放送でこの漁民葬のことを詳しく聞いたと記しており、北京からの放送を受信していたものと思われる。この放送がこの日以外にも第五福竜丸について報道したかは不明だが、今後追求してみたい。漁民葬の式次第、花輪芳名帳、名刺等の資料は協会所蔵。

13 北原節子「ルポ・死の灰にゆらく焼津の表情」（『新女苑』一九五四年一月）

14 飯塚利弘『死の灰を越えて 久保山すずさんの道』（かもがわ出版、一九九三年）では「カイロ会議」ですずのスピーチが実現されなかつたいきさつを詳細に紹介している。飯塚は新任教員として教壇にたつた一年目に「ピキニ事件」が起き、受け持った生徒のなかには、関係者の子どもや親類もいたという。以来、ピキニ事件／第五福竜丸事件の究明をライフワークとし、久保山すずとの長い親交もあった。

付記

今秋、原爆文学研究会での発表の場をいただいたことで、長年の逡巡から解放され、きわめて個人的な手紙を「資料」としてみることに、心の壁をひとつ乗り越えられた。また発表を根気強く聞いてくださった会員諸氏からの質問、ご指摘を受け、あらたな課題も見つかった。心から感謝します。